雪ノ下雪乃の短編集

toll0

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ただひたすら雪ノ下雪乃をメインとして書いていく物語

彼女の頑張りをご覧あれ

目次

雪ノ下雪乃の成長
雪ノ下雪乃の成長 ―― 1
雪乃の日誌
part1 ―― 14
part2 ―― 25
part3 ―― 35
part4 ―― 45
part5 ―― 52
part6 ―― 65
part7 ―― 75

雪ノ下雪乃の成長

雪ノ下雪乃の成長

「ふう……」

勉強も一区切りついたのだし，少し休むとしましょう。奉仕部は一学期の終了と一緒に活動がなくなったので，しばらくの間，みんなに会っていない。去年は私にとっては凄く変化した一年だったわ。そして，今までで一番楽しい一年だったわ。いきなりドアが開いて，そこからかしら。

いつも一人でいた部室に，比企谷君がやってきて，平塚先生が彼を入部させて。部室が二人の空間になって，でも，彼が私を見るのはあいさつするときと，私が話しかけたときだけ。少し寂し……いえ，なんでもないわ。由比ヶ浜さんもそのあとに入部して，三人いて違和感のない空間になっていったわね。由比ヶ浜さん，ちゃんと受験勉……夏休みの課題やってるかしら。心配ね。彼は，問題ないと思うけれど，多分怠惰に過ごしているのでしょう。……その時間に電話くらいかけてきてくれてもいいのに……

そういえば，彼の誕生日って今日だったわね。何かあげようかしら。でも，彼の趣味ってしらないのよね。何か買いに行こうかしら。今日やるべきことは終わったのだし，息抜きがてら探してみましょう。

「……えっ⁉？」ピクッ

今，何か変な感じがしたのだけれど。気，気の，せいよね。別に怖いとかそういうわけではないのだけれど，だれだっていきなりへんなものを感じとったら少しくらい驚くものよ。一般的に考えて驚くことが普通よ。別に幽霊が出たとかそういうことが怖いだなんて，ちっとも，ちっとも思っていないのだし，そもそもそんな非科学的なものがこの世の中にあるわけがないじゃない。そりゃぁ，一般大衆の中には怖がったりする人がいるけれど，私はちっとも，ちっとも怖くなんてないもよ。

早く出ましょう。いえ，怖いからとかではなく時間を有効的にかつ無駄がないように動かないといけないというだけよ。幽霊が怖いから早く家から出たいとか，そういうわけではないのよ。

っと，来てみてわかったのだけれど，ここのデパートって凄く道が入り組んでいるの

よね。少し，ほんの少し，迷ってもおかしくないわね。

「おーい，雪ノ下ー」

振り返ってみると，死んだ魚の目をした比企谷君がいた。あ会えて嬉しい。けど，彼に悟られてはいけない。平静を保たないと。でも，頬が少し上に浮いていく。それから，顔が少し紅くなっている気がする。

八幡　「顔紅いぞ。熱でもあるのか？」

雪乃　「紅い，かしら。だとすれば，あなたのせいね。あなたの比企谷菌のせいで紅くなっているだけね」

比企谷君のせいなのは事実なのだから，嘘ではないわよね？彼に会うと顔が紅くなる。どうしてそうなるかを，私はもう知ってる，けれど……

八幡　「……ねぇ，久久に会ったのに何でこんなに辛辣なの？そういう病気な

の？」

雪乃　「あなたと一緒にしないでちょうだい」

八幡　「別に俺は病気じゃない。ところで，なんで俺を呼んだの？」

雪乃　「え？呼んでいないのだけれど。遂に夢と幻の区別がつかなくなってしまったのね」

八幡　「いやそれ，どっちも現実じゃないじゃん。雪ノ下さんが電話でーーーーーーー

『ひゃっはろー』

八幡　「なんですか？」

『あれ？私が誰だかわかるの？』

八幡　「あなたほど怖い人はいませんから」

陽乃　『またまた～。やっぱり面白いな～，君は』

八幡　「んで，何の用ですか？俺，これでも受験生なんですが」

陽乃　『ん～，実はね～。雪乃ちゃんがデパートで待ってるから来てほしいってさ～。いってあげてね？』

八幡　「面倒くさいんですが」

陽乃　『じゃあ～，いってあげたらＮＡＸコーヒーを３０個あげ　八幡　「喜んでいかさせていただきます」……人が話してるのに遮ったらダメだよ？』

八幡　「ＮＡＸコーヒーにはどんな社会通念も通用しません」

陽乃　『んじゃ，今○□デパートの二階の奥の方にいると思うから，よろしく～』

ーーーーーーーーーーってことだったんだが」

雪乃　「ちょっと待って。まず，私がそんなこと姉さんにお願いするわけないじゃない」

八幡　「いや，そんなことはわかってんだが，見事に餌があったもので，さ？」

雪乃　「まぁ，えっとそんなことよりも，今日　プルルル八幡　「はい」

八幡　「あーはいはい。わーったよ。今から帰るよ」

八幡　ガチャ「あー，悪い。小町が家で待ってるからそろそろ帰るな。用も特にないようだし」

雪乃　「どうしたの？家出は連絡を絶ってからやるものでしょう？」

八幡　「何が好きで愛する小町からの誕生日の祝いをしてもらえる日に家出せにゃあかんのだ。俺の誕生日今日なの覚えてないだろ？」

雪乃　「覚えているわ。プレゼントはないけれど」

八幡　「いや，そういう嘘はいいよ。んじゃ」

雪乃　「待って。プレゼントをあげたら，覚えていたと認めてくれる？」

八幡　「まぁな。でも，用意してないんだろ？」

雪乃　「いいえ，ずっと前からあなたにもらってほしいものがあったわ」

八幡　「へ～。そんなものが。んで，くれるのか？」

雪乃　コクッ

八幡　「ありがとう。それは今家か？」

雪乃　「いいえ，今あるわ。あなたの目の前に」

八幡　「……何もねぇぞ」

雪乃　「だから……その……あげたかったっていうのは……わ……わた……」／／／

八幡　「悪い。全然聞き取れん」

雪乃　「だから！こういうことよ！」

そう言って私は彼に抱きついた。

八幡　「……えっ？えっ？えっ？えっ？」

雪乃　「だから……あなたにあげたかったのは，わ……私……」

／／／

自分でもわかる。凄く顔が紅くなってる。顔が熱い。そして，凄い恥ずかしい。生まれて初めて好きになった人で，そして、初めての告白。こんな思いなのね，恋って。そしてそんな彼の顔を見たら，彼の顔も紅くなってた。それで，そんな彼から発せられる言葉はーーーーー

八幡　「えっと……っ，つまり……どういうことだ？」

ーーーーーー相変わらずだった。彼らしいといえばそうなのだけれど。だから，改めて言葉に。

雪乃　「はっきりと言葉にしないと伝わらないようだからします。比企谷君，あなたのことが好きです。私と，付き合ってください」

はぁ，言ってやったわ。言い切ったわ。でも，多分彼は由比ヶ浜のことが好きなのでしょう。仕方ないわ。今まで散々なことを言ってきたのだから。でも，これで後悔はしない。初恋をできたんだもの。それで，その相手に告白をしたんだから。だから後　八幡「俺も好きだ」悔はしな……え？

八幡「俺も雪ノ下のことが好きだ。だから，付き合ってくれ」

雪乃「由比ヶ浜さんじゃなくて？」

八幡「何言ってんだ？」

雪乃「い，いえ。なんでもないわ。じゃあ，これからよろしくね，は……八……幡」／／／

思ってた以上に名前で呼ぶことって難しいのね。彼だって言えないに決まっている。だから，気にすることではないわね。

八幡　「よろしくな。ええと……ゆ，雪乃」

彼が名前を言えるだなんて。驚きが隠せないわ。なぜ彼が言えて私が言えないのかしら。なんだか非常に悔しいわ。

八幡　「ん，まぁ，最高の誕生日だ。今までの中で。ありがとな」

そうね。誕生日だったわね。頭が真っ白になっていたわ。もう一つ，プレゼントをあげるとしましょうか。

彼に近づき，彼の唇に。彼は驚いていたが，そのあと，目を瞑ってくれた。受け入れてくれた，ってことでいいのよね。さて，最後の行動よ。

雪乃　「誕生日おめでとう。八幡」ニコッ

八幡　「ありがとう，雪乃」フッ

そして，その夜。

「ひゃっはろー，雪乃ちゃん」

雪乃　「姉さん……」

陽乃　「ほらほら～，お姉ちゃんに言うことあるでしょ?ほらほら～，言いなさいよ～」ツンツン

雪乃　「はぁ……。姉さんのおかげで比企谷君と付き合うことになりました。ありがとうございます」

最大限に嫌さを演出した私の話をうんうんとうなづきながら姉は言う。

陽乃　「いや～，比企谷が私の弟になるのか～。楽しみだな～」

そのことを考えてなかったわ。彼の精神，もつかしら……

まぁ，でも，今日から，私に恋人ができたわけだけれど，恋人って，何をするのかし

らーーーーーーー

結局，彼とはなんだかんだで変わらない気がするわ。まぁ，彼もわからないでしょうし，特に気にすることではないわね。これが，私の一年での成長。大きな，成長。私も彼もいい方向へ成長している。このまま，どこまでいくのかしら。

陽乃　「あっ。それから雪乃ちゃん」

雪乃　「まだ何か？」

陽乃　「おめでとっ」ニコッ

雪乃　「あ……ありがとう」

多分，初めて心の底からの感情を姉さんに見せた。

雪乃の日誌
ｐａｒｔ１

雪乃「ギュウー

八幡「ペラッ

雪乃「ギュウー

八幡「ペラッ

雪乃「ギュウー

八幡「なぁ雪ノ下」

雪乃「あら？何か雑音が聞こえたわね」ギュウー

八幡「そりゃあ外では部活やってるやつらが音を出してるからな」

雪乃「あらまた」ギュウー

八幡「(知ってたよ。俺のことだってのは知ってたよ)」

雪乃「それで、何かしら?」ギュウー

八幡「ん?何が?」

雪乃「用があったんじゃないの?」ギュウー

八幡「今日って由比ヶ浜来ないのか?」

雪乃「由比ヶ浜さんのストーカーかしら?」ギュウー

八幡「ちげーよ（べべべ別にチラチラ由比ヶ浜を見たりとかしてないし？）」

雪乃「そうよね。ストーカーなら由比ヶ浜さんの動向を知ってるものだものね」ギュウー

八幡「そういうことだ」

雪乃「そういうことって……あなたもしかして経験者？やめて、こっちを見ないで！」ギュウー

八幡「（見たくて見てるわけでもない。だいたい、こいつないじゃん）」

雪乃「ちなみに由比ヶ浜さんは家の用事があるそうよ。メールきてないのかしら？」ギュウー

八幡「ん？あ、ほんとだ、きとる。携帯なんて滅多に確認しねぇからな。気づかないわ」

雪乃「メールも電話もする相手がいないものねっ」ギュウー

八幡「……ねぇ、なんでそんな嬉しそうな笑顔なの？泣いちゃうよ？」

雪乃「あなたの泣き顔なんて見たら失明してしまうわ」ギュウー

八幡「俺にそんな能力ねぇよ……」

雪乃「（でも、見てみたいかもしれないわね）」ギュウー

八幡「」ペラッ

雪乃「」ギュウー

八幡「なぁ雪ノ下」

雪乃「何かしら？ついに欲求を我慢できなくなってしまったのかしら？」ギュウー

八幡「我慢できなくなったら襲うぞ、ほんとに」

雪乃「襲うのは勝手だけれどもそのあとどうなるかは知らないわよ？」ギュウー

八幡「それは怖い（てか、襲っていいのかよ……）」

雪乃「（私は、襲われても構わないもの……）」ギュウー

八幡「……それで、なんで本読んでねぇの？いつも読んでるのに」

雪乃「いつも？そんなに私のことを見てるのかしら、このストーカーさん？（別に嬉しいだなんてこれっぽっちも思ってないわよ）」ギュウー

八幡「そりゃあ部室に限られた人数しかいないのに見ないわけないだろ。ストーカー的な意味ではなく（様になってるからついつい見ちゃうんだよ）」

雪乃「そう」ギュウー

八幡「んで、読んでない理由は教えていただけるのでしょうか？」

雪乃「本を読み終えてしまったのよ、持ってきた本全部」ギュウー

八幡「何冊だ？」

雪乃「２冊」ギュウー

八幡「２冊か（そのくらいなら頑張ればギリギリいけそうだな）」

雪乃「を３周」ギュウー

八幡「（はいおかしいですね。結果だけみれば６冊読んでますよ。何してんの？授業中読んでんの？）」

雪乃「ふふん」ギュウー

八幡「(得意げだな。てか、機嫌がいいな、今日は)」

雪乃「」ギュウー

八幡「」ペラッ

雪乃「」ギュウー

八幡「」ペラッ

雪乃「」ギュウー

八幡「……なぁ雪ノ下、なんで俺に抱きついてんの？」

雪乃「え？なんですって？」ギュウー

八幡「お前は難聴系主人公じゃないだろ」

雪乃「私がこうしていたいからよ。何か文句あるの？」ギュウー

八幡「なんでそんなに平静を保てるのかわからん。てか、本が読みにくいんだけど」

雪乃「頑張ればなんでもできる人よ、あなたは」ギュウー

八幡「やればできる人はぼっちになりません」

雪乃「憐れね」ギュウー

八幡「なら離れてくれません？」

雪乃「いやよ」ギュウー

八幡「なんなの？俺のこと好きなの？（あーやっちまったなーこれ悪手だなー俺の人生いったいどうなるのでしょうかー）」

雪乃「／／／」ギュウー

八幡「（……あれ？なんで返事がこないの？てか抱きつく力が強くなった。……まさかこいつ！）」

八幡「なぁ雪ノ下。」

雪乃「／／／」ギュウー

八幡「そんな攻撃でも俺は精神的ダメージを負わないぞ」

雪乃「へ？」ギュウー

八幡「そうやって俺を精神的に追い詰める算段だろうが、あいにく俺にその手は通用しない。残念だったな」

雪乃「……あなたは相変わらずね」ギュウー

八幡「」ペラッ

雪乃「そろそろ終わりましょうか」スッ

八幡「（やっと腕が解放された）あぁ、そうだな」

雪乃「（ここまで鈍感なのはなぜかしら？この人に対する今までの接し方が問題なのかしら？でもこれ以外の接し方なんて知らないもの……」

八幡「（声漏れてますよー。ここで勘違いはしない。勘違いするのは材木座のようなぼっちの未熟者だけだ）」

雪乃「また明日ね、比企谷君」

八幡「じゃあなー」

雪乃「（次はどうやってアプローチしようかしら……）」

part2

雪乃「今日は比企谷君と一緒にお昼ご飯を食べましょう」

雪乃「(由比ヶ浜さんは今日は三浦さんと食べるということなのだし、ちょうどよかったわ)」

雪乃「ここが比企谷君がいつもいる場所……(風も心地よくていい場所ね)」

雪乃「(それでは先にお邪魔して……)あれは!」

ニャー　　ニャー　　ニャー

雪乃「ねこ……」キョロキョロ

雪乃「(だれもいないようね。それでは)」テクテク

雪乃「にゃー」ナデナデ

ねこ「にゃー」

雪乃「にゃー」ナデナデ

ねこ「にゃー」

雪乃「にゃー」ナデナデ

ねこ「にゃー」コロコロ

雪乃「にゃー」ナデナデ

ねこ「にゃー」スピー

雪乃「あら、寝てしまったの……」

雪乃「(私もそろそろご飯食べないといけないわね。あら?なぜここにいるんだったかしら……)」

雪乃「は!ま、まさか……」チラッ

八幡「よ、よう雪ノ下。き奇遇だな」

雪乃「い、いいつから、そそそこにい、いるの?」

八幡「い、いやーほんと、今さっき。ついさっき。お前がねこと戯れてるところとか知らない(はい。言っちゃったぜ!俺の命が尽きるぜ!さらば小町!最後に小町の名前が出るあたり、いい兄である)」

雪乃「な……な……あ……あぅ……///」

八幡「と、ところでどうしてこんなとこにいるんだ？（なんで恥ずかしがってんだよ。いつもの口撃はどこにいったんだよ。てか、かわいいじゃねーかよ）」

雪乃「な、なんでもないわよ」テッテッテ

八幡「（ほんとにあいつはなんでこんな場所にあたんだ？さっぱりわからん）」

雪乃「（あーーーもう！やだっ！あんなところ見られちゃうだなんて。このあとにお昼ご飯を一緒にだなんてできないじゃないの。恥ずかしい………）」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

雪乃「（これから部活だから私は部室にいるのだけれど、どうやって比企谷君に会えばいいのかしら………）」

八幡「よ、よう………」ガラガラ

雪乃「ひっ！比企谷君、こここんにちは（やってしまったわー！もうだめー！）」

八幡「（慌てすぎだろ雪ノ下……めっちゃかわいいんだけど」

雪乃「比企……谷……君……？」

八幡「どうした？」

雪乃「声に出てるわよ……／／／」

八幡「な！……／／／」

雪乃「……」アワアワ

八幡「……」ポカーン

雪乃「とと、ところでゆゆ由比ヶ浜しゃんは？（もうやだ！もうお終いよ）」

八幡「ゆ、由比ヶ浜ならいつもどおり遅れてくるぞ（あの雪ノ下が噛んだ、だと。どんだけ慌ててんだよ。ちくしょう、見た目どおりでかわいいじゃねーかよ）」

雪乃「そ、そう……」

八幡「今日は本は持ってきたのか？」

雪乃「えっ？あ、あの、そそそうね。ちゃんと持ってきたわよ」

八幡「ふーん」

雪乃「あら？また抱きついてほしいのかしら？」

八幡「（ちゃっかり立ち直ってるな）あーそうだな。美少女に抱きつかれて悪い気はしないからな」

雪乃「なら、やってあげるわ」スッ

八幡「ちょおいおいおいまてまてまて待つんだ」

雪乃「やってあげるからおとなしくしなーーーーーーーー」

結衣「やっはろー!!?」ドーン

雪乃「っ……ゆ、由比ヶ浜さんこんにちは」

結衣「やっはろーゆきの〜ん。ヒッキーも」

八幡「ぉん」

結衣「ところでさーゆきのん」

雪乃「なにかしら?」

結衣「なんでヒッキーに近づこうとしてたの？」

雪乃「え？あ、そのね（まずいわ、非常にまずいわ）」

八幡「いや、それはだな」

結衣「ヒッキー、またゆきのんに変なことしたでしょ？」

八幡「いや、そんなことは断じてーーーーーーーー」

雪乃「ええ、そうよ。またこの男が私に」

結衣「ヒッキーきもーい」

八幡「（雪ノ下め……）」

結衣「それよりゆきのーん」ギュウー

雪乃「暑いから離れてちょうだい………」

八幡「おおお、百合空間が一瞬で形成されたぞ。さすがは百合ヶ浜と百合ノ下………」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

雪乃「そろそろ終わりにしましょう」

結衣「じゃあねっ、ゆきのん‼︎？ヒッキー‼︎？」フリフリ

八幡「ああ、じゃあな」

雪乃「さようなら、由比ヶ浜さん」

八幡「んじゃま、俺も帰るわ」

雪乃「ええ、さようなら。ええと、誰かしら？」

八幡「帰りくらいちゃんと名前で呼んでくれよ……」

雪乃「はぁ……さようなら、比企谷君」

八幡「そこまで嫌そうに言うなや。泣くぞ？泣いちゃうぞ？」

雪乃「そんなことどうでもいいからもう帰ってちょうだい」

八幡「どうでもよくないんだけど。じゃあな」

雪乃「ええ、また明日ね、比企谷君」

雪乃「（明日はお昼ご飯を一緒に食べましょう。頑張りましょう）」

part3

雪乃「明日こそ比企谷君とお昼を一緒に食べるわよ」
雪乃「(彼の分も作ってあげましょうか。そうね、それがいいわね。彼に食べさせてあげようかしら………)」
…………………………
雪乃『ひ、比企谷君、あ、あーん」
八幡『え?おおう、ありがとう雪乃』
…………………………
雪乃「~~~~~~~~~~／／／」クルクル

「雪乃ちゃん楽しそ～」

雪乃「は！……なぜいるのかしら？私の家なのだけれど」

陽乃「陽乃だよー！たまたま近くを寄ったから来てみたけど。へぇー、雪乃ちゃんは比企谷君が好きなのかー？やっぱりお姉ちゃんの見立ては正しかったのかー」ウンウン

雪乃「それがどうかしたのかしら？」

陽乃「雪乃ちゃんが妄想でこんなことをしてるなんて……」

雪乃「っ……／／／もう忘れてちょうだい。というか帰ってちょうだい」

陽乃「もう～冷たいな～。仕方ないから帰ってあげるよ」

雪乃「そうしなさい」

陽乃「あ！そうだ雪乃ちゃん。比企谷君は家庭的な料理の方が好きだよ」

雪乃「そう。はやく帰って」

陽乃「ばいば～い」フリフリ

雪乃「比企谷君は家庭的なのが………」ボソボソ

ーーーーーーーーーーーーーーー

雪乃「(比企谷君はまだかしら。今日は昨日みたいにねこに気をとられーーーーーーーーーー」

ニャー

雪乃「(我慢よ我慢)」

ねこ「」シュン

雪乃「（ねこ……は！だめよだめよ。昨日と同じ失敗だなんてだめよ）」

ねこ「」テクテク

雪乃「（よく耐えきったわ私。さて、あとは比企谷君が来るのを待つだけね）」

雪乃「」

雪乃「」

雪乃「」

雪乃「」キョロキョロ

雪乃「(来ない、わね。今日は来ないのかしら……)」

八幡「(え?なんで雪ノ下がいんの?ついに俺の安らぎの空間すらも奪いにきたの?そんなに俺が邪魔なの?なんなの?だが俺も引き下がれない。俺の場所は俺が守る)」

八幡「よう雪ノ下」

雪乃「ひっ」ピクッ

八幡「(……えーなんなのー?俺の声って聞いた人に恐怖を与えるの?)」

雪乃「ここんにちはひ、比企谷君」

八幡「どうしたんだ?こんなところで」

雪乃「そ、それは……」モジモジ

八幡「（ほんとはこいつ雪ノ下じゃねーんじゃねーのか？最近明らかにかわいいと思える動作が増えてんだけど）」

雪乃「ひ、比企谷君と、いい一緒にお昼食べようと、思ったのだけれど……／／／」

八幡「……は？（あーこれはあれだな。確信が持てる）」

雪乃「ど、どうかしら？」

八幡「体調崩したのか？」

雪乃「急に、どうしたのかしら？」

八幡「いやだって体調崩してないとお前がそんなこと言うわけないじゃんっていうような発言だぞ。なんかの病気か？」

雪乃「確かに恋という病気だけれど……」ボソボソ

八幡「なんだって？」

雪乃「な、なんでもないわ。それよりもどうなのかしら？」

八幡「なにがだ？」

雪乃「お昼ご飯よ」

八幡「んーまぁ時間もないしな。仕方ないか」

雪乃「と、ところで……」

八幡「ん？」

雪乃「お弁当、作ってきたのだけれど……その……食べてくれない……かしら……？／／／」

八幡「……毒殺？」

雪乃「そんなわけないじゃない。あなたのために作ってきたのだから／／／」

八幡「うっ……そ、そうか。ならいただきます」

雪乃「ど、どうぞ」ハイッ

八幡「おお……」モグモグ

雪乃「ど、どうかしら……？」

八幡「うまい、というかうまい以外のコメントができないくらいなんだけど（唐揚げやら卵焼きやらで俺の好きなやつばかりだし）」

雪乃「そ、そう……あ、ありがとう……／／／」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

八幡「ごちそうさま。うまかった。ありがとな」

雪乃「っ………い、いいえ。別に、その、気にしなくていいわ／／／」

八幡「あーそのーなんだ？またそのうち作ってくれるか？」

雪乃「ええ、そのうち持ってくるわ（やったっ！）」

八幡「んじゃあなーまた部室で」

雪乃「ええっ、また」ニコッ

八幡「っ………（めっちゃかわいい笑顔とか。惚れそうになるレベルだ。てかあれじゃね？俺のこと好きなんじゃね？騙されるな比企谷八幡。あれは雪ノ下のなんらか

の陰謀だ。ふぅー危なかった。うっかり勘違いするところだった）」

雪乃「（今日の作戦は成功よっ。次はなにをしてアプローチしようかしら）」

part4

雪乃「はぁ……」

雪乃「(嬉しさのあまり今日の授業全然集中できなかっなわ……けれど仕方ないわね。だって比企谷君に褒められたんだもの)」

八幡「うっす」ガラガラ

雪乃「こんにちは」

八幡「」スッ

雪乃「あ、あのーーーーーーーー」

結衣「やっはろー!!?」ガラガラ

雪乃「こんにちは。由比ヶ浜さん（由比ヶ浜さんは別に悪いことをしているわけではないわ。そうよ）」

結衣「ゆきのんやっはろー‼?あ、ヒッキーも‼?」

八幡「よう（あ、ってなんなんですかね、あ、って）」

結衣「そうだゆきの～ん。今度遊びに行こうよ～」ダキッ

雪乃「そ、そうね。行くわ。行くから離れて」

結衣「ヒッキーもね‼?」

八幡「いや、俺はいろいろと忙しいから無理だ」

結衣「ヒッキーが忙しいわけないじゃん‼?ねぇ～行こうよ～」ダキッ

八幡「（当たってる当たってる。やばいやばいやわらかいやばいやばいやばい）」

八幡「わかったから離れろ……」

結衣「やったー!!?」

雪乃「（今明らかに比企谷君の眼が潤っていたけれど。……！まさか、やっぱりそうかしら。い、いえまだそうと決まったわけではないわ。ない、けれど……）」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

雪乃「今日はこれで終わりましょう」

結衣「ばいばいっ、ゆきのん!!?ヒッキー!!?」

八幡「じゃあな」

雪乃「ええ、さようなら」

八幡「んじゃ雪ノ下、鍵よろしくな」

雪乃「あ、あの比企谷君。あの、その………」

八幡「なんだ？」

雪乃「い、いいえ。なんでもないわ。ごめんなさい。さようなら」

八幡「じゃあな」

―――――――――――――

雪乃「はぁ………」

雪乃「」プニプニ

雪乃「はぁ……」

雪乃「（比企谷君のあの眼はやっぱりそういうことよね……）」

雪乃「」プニプニ

雪乃「（どうして由比ヶ浜さんにはあるのかしら）」

……

八幡『俺、慎ましやかな胸には興味ないんだ』キリッ

……

雪乃「」ウルウル

雪乃「比企っ……谷っ……君……」シクッシクッ

雪乃「」プニプニ

雪乃「」シクッシクッ

雪乃「うっ……比企谷君……」シクッシクッ

陽乃「(お昼どうだったか聞きに来たら雪乃ちゃんが泣いてる。かわいい)」

陽乃「(どうしよう……話かけるべき？比企谷君はどっちでもいいって言うべき？)」

陽乃「(……)」

陽乃「(うん、ほっとこう。そっちの方が楽しそうだし)」♪

陽乃「(がんばってねっ。雪乃ちゃん)」

雪乃「比企谷君……」シクッシクッ

ｐａｒｔ５

雪乃「」

雪乃「」

八幡「よう」ガラガラ

雪乃「こ、こんにちは……」

八幡「(雪ノ下が罵倒してこない、だと……一体何があったんだ)」

雪乃「(聞くべきかしら？比企谷君の胸の好みを。けれどそれじゃあ比企谷君に好きって言ってるみたいじゃない……どうすればいいのかしら……？)」モジモジ

八幡「(ほんとに何かの病気か？なんなの？そのかわいい動作。もう永遠にそれして

ろよ）」

八幡「ん？（俺としたことが本を忘れてしまった。教室にあるが、取りに行くの面倒だし、音楽でも聞くか）」

雪乃「」モジモジ

八幡「（おっ、イヤホン発見）」

結衣「やっはろー‼？」

結衣「ってヒッキー何聞いてるの？」

八幡「お前に言ってもわからんのが落ちだ」

結衣「またバカにしてー」プクー

八幡「じゃあ由比ヶ浜、バカって漢字でどう書くんだ？」

結衣「バカに漢字なんてないよ‼？カタカナだよ‼？ヒッキーのバーカ‼？」

雪乃「馬で鹿と書いて馬鹿というのよ由比ヶ浜さん。そのくらい常識なのだから覚えておいた方がいいわよ」

八幡「（もう復活ですか雪ノ下さん）」

雪乃「（もう考えても仕方ないわ……）」

結衣「」ポカーン

八幡「（はぁ～、馬鹿がいなくなるとほんとに静かだ。音楽に集中できる）」

雪乃「（まさか由比ヶ浜さんがあそこまで、その、あれだとは……）」

結衣「それで、ヒッキーは何聞いてるの？」

八幡「んあ？お前らリア充には関係のない歌だ。てか、お前らの聞く歌は俺にはあわん」キリッ

結衣「はあ⁉？何それ⁉？キモい‼？まじキモい‼？ヒッキーキモい‼？」

八幡「キモくて結構。お前らリア充はアニソンとかをキモいとか思ってるだろ」

雪乃「でもそうね。世の中の一般論はアニメの歌などをそう捉えてるものね。偏見よね」

八幡「なんだ雪ノ下？アニソン聞いたりするのか？（ここらで罵倒をしてくるのが雪ノ下クオリティではなかったのか？）」

雪乃「まだ聞いたことないわ。けれど、聞いたこともないのに偏見は持ちたくないもの。ちなみに私がよく聞くのはクラシックよ」

八幡「さすがは雪ノ下だな（心の底から思うぞ）」

結衣「それで？どうせプリキュアでしょ？ヒッキーキモい‼？」

八幡「プリキュアは純粋でキモい要素なんてない。今聞いてるのはプリキュアじゃないし」

結衣「じゃあ～聞かせてよ～」

八幡「やだ」

結衣「むっきー‼？もういい‼？ヒッキーまじキモい‼？ゆきのん、もう帰るね‼？ヒッキーのバーカ‼？」タッタッタ

雪乃「あなた、ちゃんと謝りなさいよ……」ハァ

八幡「わかってる……」ハァ

雪乃「それで？何を聞いてるのかしら？聞かせてもらえるかしら？」

八幡「ん？あぁ、わかった。んじゃ、こっちこい」

雪乃「えっ⁉？（こ、こいって……／／／）」

八幡「なんだよ……（変なこと言ったか？）」

雪乃「なぜそっちに行くのかしら？」

八幡「イヤホン届かねぇだろ」

雪乃「イ、イヤホン……？なぜ今いるのかしら？」

八幡「音出してたら依頼人が来たときに入ってこれないだろ？」

雪乃「あ、あぁ、そういうこと……」

八幡「というわけだ。こっちにこい」

雪乃「え、えぇ」トコトコ

八幡「ほいっ」

雪乃「あ、ありがとう（え？左耳用？そ、そしたら……）」

八幡「（しくった。右耳のを渡すべきだったか。めっちゃ近い……）」

雪乃「（比企谷君の顔がすぐ横に……／／／）

雪乃「（え、ええと……聞こえてくるのは……）」

ありったけの気持ちで　アイシテルってつぶやく
昨日までの想いあふれ　サラサラとけてく
これっきりの祈りで　伝われればいいのに
確かめあえる言葉をくれて　神様ありがと
明日二人は手をのばして
いつもよりも強く握りあう
明日二人は手をのばして
抱き合って　キスをして　愛しあう

雪乃「なっ……⁉？あ、あっ」カァァァ

八幡「ん？どうした？（めっちゃ顔赤いじゃん。勘違いする要素しかないじゃん。どうしよう……）」

雪乃「ひっ、比企谷君、あ、ありがとう……／／／」

八幡「いや、気にするな」

雪乃「そ、それじゃあ、ええと、も戻るわね」

雪乃「え？（じ、地震……っ、強いわね）」

八幡「え？（地震か、あんま揺れてはいないな）」

雪乃「（えっ、バランスが……）」

雪乃「キャッ！」

八幡「お、おい雪ノ下！」ダキッ

雪乃「（かかかか、か彼が私を抱きしめて……）」

八幡「（助けるためとはいえ抱きついてしまった。しかも、なぁ……）」

雪乃「あっ……なっ……／／／」カァァァ

八幡「おっと、地震が終わったな」

雪乃「そ、そうね……／／／」

八幡「んーと、まぁあれだよ。もう時間だし帰ろうぜ？」

雪乃「え、えぇ。そ、そうね。それから、その……」モジモジ

八幡「ん？」

雪乃「あ、ありがとう……／／／」ウワメヅカイ

八幡「き、気にするなよ（ぐっ……なんなんだよ、この破壊力は！）」

雪乃「（今がチャンス、よね）お礼をするから、その、ちょっと待っててもらえるかしら？」

八幡「お礼なんていいって。気にするなって言っただろ？」

雪乃「いいのよ。私がやりたいだけなのだから」

八幡「（そう言って雪ノ下の顔が近づいてくる。そうだ、顔だ）」

雪乃「／／／」カァァァ

八幡「（雪ノ下の顔がすぐ間近にきて、それで……」

平塚「おーい、大丈夫だったか？てか、もう時間だぞ？鍵を返しにこい」

雪乃「」ピクッ

八幡「今から返しに行くところですよ（反射的に雪ノ下との距離はとった）」

雪乃「ええ、返します（もう少しだったのに！）」

平塚「いや、私はちょっとここでやりたいことがあるからな、鍵はいい。というか、時間だからとっとと帰れ」

八幡「へーい」

雪乃「わかりました」

雪乃「（んー！いいところだったのに！平塚先生、間が悪いわよ！）」

八幡「帰るか」

雪乃「そうね……」

雪乃「（うーーー、私のせっかくの覚悟が……）」

雪乃「（けれど……）」

八幡「／／／」

雪乃「（彼も少し顔が赤くなっていて、作戦の半分は成功、かしらっ）」♪

part6

雪乃「(それにしても、彼と二人で歩くだなんて、懐かしいわね。あのときはこんな感情、持ってなかったものなのにね)」

八幡「あ、なぁ雪ノ下」

雪乃「なにかしら?」

八幡「付き合ってくれ」

雪乃「ええ」

雪乃「(ん?えっ、えっえっ⁉?ななな、なにをかかか彼は言っているの⁉?ええええっ、どどっ、どうすればいいのよっ⁉?///)」

八幡「小町がカマクラの首輪を買ってきてくれってことで、俺にそんなセンスないからさ。悪いな」

雪乃「構わないわ（そ、そういうことね……）」

八幡「今度の土曜でいいか？」

雪乃「ええ、それで構わないわ」

八幡「つーわけでよろしく。じゃあな」

雪乃「ええ、さようなら」

八幡「（って、なんか雪ノ下をデートに誘ったみたいじゃねーかよ！なんかすげぇナチュラルに誘っちゃったんだけど！／／／）」

雪乃「（告白ではなかったとはいえ、その、ででで、デートよ、ねこれは／／／）」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

雪乃「(集合の３０分も前に着いてしまったわ。楽しみにしすぎよね。でも、その、比企谷君との、その、デートな、わ、わけだし……／／／)」

八幡「おう雪ノ下、早かったな」

雪乃「ひっ⁉?」ピクッ

八幡「(なにその反応かわいいんだけど。あれだよ?勘違いして襲っちゃうよ?そんなことしねぇけど)」

雪乃「こ、こんにちは比企谷（いきなり話かけないでよ!もうっ!)」

八幡「んじゃ、行くか」

雪乃「ええ、そうね」

■＊■＊■＊■＊■＊■

雪乃「やっぱり混んでるわね（比企谷君に密着してる！／／／）」

八幡「そ、そうだな（ちくしょう！雪ノ下の肌柔らけえじゃねーか！／／／）」

雪乃「えっ（電車が……）」

八幡「おっ（電車が揺れる。んで、その結果……）」

雪乃「」カァァァ

八幡「（雪ノ下が俺に抱きつくということが起きるわけでして。でも俺は勘違いしない。もてない男子特有の勘違いはしない）」

雪乃「（あわわわわ……ひ、比企谷君に抱きついてる。わざとじゃないとはいえどう

するのよ！／／／)」

雪乃「っ………ご、ごめんなさい」

八幡「き、気にするな………(なんで顔赤らめてんだよ。自制だ自制。自制をするんだ俺)」

――――――――――――――――

八幡「はぁ、混んでて疲れた」

雪乃「ええ、そうね」

八幡「お前は平気そうだな」

雪乃「もちろん！比企谷君とのデートですものっ(あの程度で疲れるだなんてさすがは引きこもり君ね)」

八幡「なっ……!?？／／／」カァァァ

雪乃「？（どうかしたのかしら？）」キョトン

雪乃「それよりも早く行きましょう。時間は有限なのよ（比企谷君とのデートなのだから堪能してかないと♪）」

八幡「あ、あぁ、そうだ、な……／／／」

雪乃「（ほんとにどうしたのかしら？）」

八幡「（動揺しすぎだろ俺！いや、だがあの雪ノ下にあんなこと言われたら……は！なるほど、読めた。雪ノ下めそういうことか）」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

雪乃「これなんてどうかしら？」

八幡「ん～いいんじゃないか？」

雪乃「それじゃあ、こっちは？」

八幡「ん～いいんじゃないか？」

雪乃「あなた、さっきから同じことしか言ってないじゃない……」

八幡「いや仕方ないだろ……」

雪乃「ならこっちは？」

八幡「それはちょっとなー」

雪乃「こういうのは嫌なのね。なら今までの比企谷君の反応からして、これがいいと

思うわ」

八幡「おお……（青の小洒落た感じのやつだ。カマクラに似合うかは知らんが、俺がこのデザインを気に入った。なんかこれだけ聞くと俺が付けるみたいになってるな）」

雪乃「いるのは首輪だけかしら？ご飯とかは大丈夫かしら？買えるときにまとめて買っておいた方がいいと思うのだけれど。」

八幡「いや、大丈夫だ、問題ない」

雪乃「そう、なら帰りましょうか」

八幡「おう、そうだな」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

雪乃「……」

八幡「……」

雪乃「……」

八幡「……」

雪乃「(な、何か話さないと。比企谷君と話さないと。私が降りてしまうじゃない……。というか、今日が一番の告白のタイミングじゃないのかしら? いい、いつ言えばいいのかしら?)」モジモジ

八幡「(雪ノ下の巧みな技に気がついたからいいものの、気がつかなかったらとんでもないことになってたな。精神的に削る、そもそも雪ノ下が何か最初にしてきたのはそれが目的だったはずだ。そう思えばすべてに合点がいく。なんら難しいことはない。はーよかったー。思わず勘違いしてーーーーーなんてならなくて)」

雪乃「（私の降りる駅……）比企谷君、さようなら）」

八幡「ん？あぁここだったか。俺も降りるよ。付き合ってくれた礼だ。一人で帰らすのも悪いしな（雪ノ下も女子なわけで、さらにかわいいからな。何かに巻き込まれる可能性もあるし」

雪乃「っ……あ、ありがとう……／／／（か、かわ、かわいい……／／／）」

カァァァ

八幡「（あ、だめだこりゃ。わかってても削れてく）」

雪乃「（これがチャンスよねっ！）」

part7

雪乃「ソワソワ

雪乃「キョロキョロ

雪乃「ポワポワ

雪乃「シュン

八幡「(……何してんだ?駅から出てずっとこんな調子で一喜一憂してる。こんなに感情あったのか雪ノ下)」

八幡「なぁ、さっきからどうしたんだ?」

雪乃「っ……!??な、なんでも、その…ない、わ……」

雪乃「(さっきから告白の言葉を考えて、それを頭の中で言ってみているのだけれど、全てフられるイメージしかでてこないのはなぜかしら……)」

……

雪乃「ひ、比企谷君。あなたの、こと、が、好きです！わ、私と、つ付き合ってください！」

八幡「わりっ、眼中になかったわ。すまん」

……

雪乃「」ウルウル

八幡「(なんか泣き出したんだけど!?? いや、性格にいえば涙目になっているだけだ。てかかなり俺が動揺してる。正確を性格にするくらい動揺してる。これは、やばいな)」

八幡「なぁ雪ノ下」

雪乃「なに…かしら…？」

八幡「悪かったな」

雪乃「えっ？な、なんで？」

八幡「いや、俺と帰りたくなかったからそんなことしてんだろ？（それならそうだと言ってくれればいっそのこと楽になれるしな。いや別に死ぬわけじゃねーけど）」

雪乃「……わよ」ボソッ

八幡「なん？」

雪乃「そんなことないわよ！」

八幡「ふぇん⁉？（なんだこの声どこから出たんだよ⁉？てか、雪ノ下の大声出すとこって見たことなかったな）」

雪乃「そんなこと…ないわよ…」

八幡「いやだってお前ーーーーー」

雪乃「あなたにどうやって告白しようか考えてたのよ！」

八幡「」ポカーン

雪乃「」プルプル

八幡「（……い、いや。勘違いするな比企谷八幡。告白ってのはあれだ、なんか隠し事してんだな。そうに違いない……そうだ、そうに違いないんだ）」

雪乃「(こ、告白って言ってしまったわ……!?ど、どうすればいいのよこれから……!)」

雪乃「」

八幡「」

雪乃「」

八幡「」

雪乃「」

八幡「……なんの告白だ?隠し事でもしてたのか?」

雪乃「っ……」

雪乃「(彼には…届かなかったのかしら…私の…思い、は…そんなこと言うなら…はっきりとフってくれればいいの…に……)」ポロポロ

八幡「(今度は本当に泣き出した……この反応は、その、まぁあれだな。……勘違いできねぇよ、な。)」

八幡「国語で習っただろ?ちゃんと、まぁ、文を構成しないと、その、気持ちも伝わらないんじゃねーのか?(これ以上の言葉を俺は有していない。あとは目の前の彼女次第だな)」

雪乃「(……そう、よね。私らしく、ちゃんと言葉で伝えないと、いけないわね)」

雪乃「(なら、私ははっきりと言葉に!)」

八幡「(落ち着いたか)」

雪乃「すぅー……ふぅー……わ、私…雪ノ下雪乃は…あ、あなた…比企谷八幡の

…こと…が…」プルプル

雪乃「(言うのよ。ちゃんと、最後まで!)」

雪乃「比企谷君のことが!好きです!!だ、だから…私と…付き合っ…て…く、ください!!」プルプル

八幡「……」

雪乃「///」プルプル

八幡「ふぅー……はぁー……」

雪乃「(どんな結果でも、ちゃんと受け止めるのよ。ちゃんと……)」

八幡「お、俺はーーーー」

雪乃「えっ……？（ゆ、揺れる……）」
八幡「なっ……⁉？（結構でけぇ揺れだな……）」
八幡「おい雪ノ下、掴まれ！」
雪乃「えっ、ええ」ギュッ
八幡「これは震度いくつくらいだ？」
雪乃「３は、あるわよ」
八幡「んじゃ、もう少し寄っといた方がいいな」ダキッ
雪乃「ぁ…うぅ……」／／／
八幡「」ナデナデ

雪乃「」ギュッ

八幡「」ナデナデ

雪乃「わ、私は言葉にしたの…だから…あなたも言葉にしな…さいよ…」ポフッ

八幡「（胸に顔埋めて、さらにそこから上目遣い。せこいよなー雪ノ下）あぁ、わかった。んとなー、コホン。俺は、比企谷八幡は、雪ノ下雪乃のことが、好き…だぞ…」

雪乃「それで？」

八幡「お前意地悪すぎんだろ……」

雪乃「ふふっ、あなたがそれを言うの？」

八幡「けっ……だからな、そのな…俺と付き合ってくれ。もちろん恋人とし…て…／／／」

雪乃「７０点ね」

八幡「微妙だな⁉？」

雪乃「語尾が弱くなっていくんだもの。それはもちろん減点ポイントよ」

八幡「さいで……」

雪乃「けれど」

八幡「けれど？」

雪乃「恋人としてという部分は、その…プラスポイントよ…／／／」ボソボソ

八幡「なんて？」

雪乃「なっ、なんでもないわよ！」プイッ

八幡「（ふっ、まぁ加点部分はなんとなくわかる、かな。そんなに顔も耳も、真っ赤にしてたら」

雪乃「だか…ら…また…／／／」

八幡「（おうおう、さらに赤くして。まったくかわいげのあるやつだな）」

雪乃「（卑怯よ、ほんとに……いつも、いつも……卑怯なのよ、比企谷君は……）」モジモジ

雪乃「あと、それから」

八幡「まだあんの？」

雪乃「私に向かって勉強に関することで例えを出すのは愚策よ。そして」

ギュッ

雪乃「生意気よっ」ニコッ

八幡「っ……そ、そうかよ／／／」プイッ